

現在連載中の河北新報の記事から

東北大学 小原 隆博

ISAS, CRL, NICT, JAXA を経て母校の東北大学に戻って3年が経ちます。25年ぶりの仙台市は大きく変貌していて、別の街に住んでいるかのように感じています。この度の記念文集に際しまして、地元仙台市の明治創業の新聞であります河北新報に全20回で連載をしていますエッセイ記事（プリズムという科学欄です）の中から記事を2つ選びました。宇宙科学研究所の今後の益々の発展を祈っておりますとともに、定年までの月日、私もラストスパートしたいと思っています。

① フロリダの宇宙基地／オーロラ発生の謎に迫る 2014年10月22日朝刊掲載

文部省宇宙科学研究所（現宇宙航空研究開発機構）に入所して二つ目の仕事は、米航空宇宙局（NASA）と共同で進めているジオテールという名前の人工衛星でした。ジオは地球、テールは尻尾という意味です。地球が尻尾を持っているということはあまり知られていませんが、その正体は磁力線です。

地球の磁力線は、南半球から出ていき、北半球に入ります。南半球の高緯度から出た磁力線は、月軌道を越えて、ずっと遠くまで伸びることが知られていました。あたかも、パチンコのゴムひもみたいに引っ張られて伸びていたのです。その伸びた磁力線が突然、縮むことがあり、その時、極地方ではオーロラ現象が発生するとされていました。

ジオテール衛星は月軌道を越えて遠い宇宙空間まで行って、磁場やエネルギーの高い粒子を観測し、オーロラの発生原因に迫ろうとしました。打ち上げ用にNASAのデルタ2型ロケットが選ばれ、向井利典先生を中心とした私たち宇宙研のメンバーは、米フロリダ州のケネディ宇宙センターまでジオテール衛星を運んでいきました。輸送では通関などの難しい局面もありましたが、米政府の支援を頂き、1992年7月にジオテール衛星はケネディ宇宙センターから打ち上げられました。

ケネディ宇宙センターはとても広く、入り口から20キロ以上も車で走って、ようやくロケット発射台にたどり着きます。途中、スペースシャトルの姿が見えたかと思うと、ワニが水路で泳いでいるなど、フロリダの気候と自然、そして宇宙基地の規模に圧倒されました。

② 宇宙科学研究所の思い出／成果を広報で伝える 2014年11月26日朝刊掲載

文部省宇宙科学研究所（現宇宙航空研究開発機構）時代の思い出は、宇宙研ニュースです。宇宙研が東京・駒場から相模原市に移転したころ、前任の先生から引き継いで編集委員になりました。神奈川県北部にある相模原市は丹沢連峰が近くに望め、相模川の溪流が市境を流れる、とても環境のよい街です。

宇宙研ニュースは毎月発行され、編集委員会も月1回のペースであります。編集委員会はとても面白く、にぎやかでした。編集長の松尾弘毅先生を中心に、的川泰宣先生、中谷一郎先生が編集会議を引っ張っていました。交わされる言葉は明快でウイットに富んでおり、会議をいっそう豊かなものにしていました。

宇宙科学研究にとって広報はとても大切です。大きな予算を使うロケットや科学衛星の成果は、遅滞なく、かつ中高生の皆さんにも分かってもらえるように表現する必要があります。インターネットの時代になって、紙からホームページ（HP）に切り替えました。担当していた1990年代は1万人の購読者がいました。HPになってからは閲覧数が100万件を超えることもありました。

教育用ビデオも作りました。「母なる太陽」「オーロラのふるさと」を担当したのを最後に、郵政省通信総合研究所（現独立行政法人情報通信研究機構）の宇宙環境センターに転出することになりましたが、製作したビデオがコンクールで経団連会長賞をもらったのは良い思い出です。研究者は自分たちの仕事が生かされることに広がっていくことをとてもうれしく感じる人種であると、確信をした次第です。